
今日から我が家に宇宙人！？

久路間左京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日から我が家に宇宙人！？

【Nコード】

N9613B

【作者名】

久路間左京

【あらすじ】

学校から帰って来てみるとそこには謎の女が……。自称、宇宙人！？『田中太郎』！？『トイレの花子さん』！？不法侵入で警察沙汰なのに、この女は何を言ってるんだ！？はあ、まったく。これから俺はどうなる事やら……

第1話：遭遇、不法侵入者！？

「初めまして。今日から住まわせてもらう事にしました。よろしく頼みます」

「・・・はい？」

学校から帰って来て部屋にはいると見知らぬ女が俺の部屋にいた。

「・・・どこから入ってきた？」

ちゃんと戸締まりはしたと思ったが・・・

「ん？そこから」

彼女が指を指した先には割れたガラスと開いた窓。ガラスを割って鍵を開けたらしい。

「そうか・・・」

俺は携帯電話を取り出し110番を押した。

「あ、警察ですか？今俺の部屋に不法侵入者が居るんですが引き取ってもらえませんか？」

「いつ、いやっ、ちょっと待ってください！せめて少しだけでも話を聞いてください！」

「すみません、ちょっと待ってください・・・、で？話ってなん

だ？」

「じつは私、宇宙から来たんです」

「もしもし、110番からも救急車ってお願いできますか？」

「だからちょっと待っててくださいってば!!」

「はぁ・・・、すみません。またあとで掛け直します。・・・はい。場合によってはこちらで処理するので。・・・はいわかりました。それでは」

「処理って・・・、私は何をされるんですか？」

携帯電話を切り青ざめた顔をしてる女に話しかけた。

「で、宇宙人さんとやら？あんた名前は？」

「あ、はい。田中太郎です」

「ぼりぼり日本名じゃん!!しかもお前女だろ!!太郎さんっておかしいだろ!!」

「え?けど地球ではこの名前が一番多いと聞いて怪しまれないかなと思ったんですけど・・・」

「おかしいだろそれ!ほぼ日本限定じゃん!!世界中に『田中太郎』さん何人いると思ってるんだよ!それにさっきも言ったけど女でその名前は明らかに変だろ!!」

「ひいつ、そんなに怒鳴らないでください。あつ、それと名前ならもう一つあります」

「なんだ？」

「『トイレの花子さん』」

「これもちがーうーうー！！やっぱ日本名！！しかももう人の名前じゃなくなってきたし！！いい加減トイレに押し込んで流したろかあ！？」

「うわあ！すみません！すみません！」

「埒^{らち}があかない。次！あんたどこから来た！？」

「んと、『キムズフォニア』って言う星から来ました。地球の単位で言うと冥王星から200京^{けい}光年くらい離れた星です」

「ずいぶん遠い所から来たな。宇宙人って言うくらいだから、やっぱ、UFOで来たのか？」

「UFO？なんですか、それ？」

そう言って首をかしげる自称、『田中太郎』又は『トイレの花子さん』。よく考えたらこいつは俺を馬鹿にしているのか？

俺はこの女を観察してみた。

まず第一に服装だ。

なんて言うんだろうな。見た事ないファッションだ。表現できない。

色は上が青と白の二色だけなんだが、下は緑と白、その他色々。とにかく変わった服(?)を着ている。

髪はクリーム色をしていて腰のあたりまである。さらさらのストレートだ。

目はクリッとしていて、整った顔立ちをしている。

背丈は座ったままだからわからないが160くらいか?結構美人の部類に入るだろう。

特に目を引いたのは瞳の色だ。

蒼いような翠色ののような薄い黒のような見ていると吸い込まれてしまいそうな、そんな色をしている。

「?、どうしたんですか?」

「――っ!なんでもない」

いかん。見入ってしまった。

「んで?なんだっけ?」

「ですから、UFOってなんですか?」

「いや、ほら。宇宙人って普通UFOって言う空飛ぶ円盤に乗っ

てやって来るだろ」

「今時そんな古くさい物になんて乗りませんよ？それにあれば子どもが乗るような玩具です」

「じゃあ、どうやってここまで来た？」

「それが、私にもわからないんです」

「？」

「キムズフォニアでの移動方法は『ワーカー』っていう特殊な装置で瞬時に好きなところへ移動できるんです」

「それで来たんじゃないのか？」

「いえ、ワーカーで移動できる最大距離は300億キロ。しかも、私が持っている携帯用ワーカーでは5000万キロが限界です。地球には全然届きません」

いや、それでもかなりの距離だな。

「じゃあ、どうして？」

「だ・か・ら、わからないって言うてるでしょう！馬鹿ですか、あなたは！何かの弾みで事故が起きたとしか考えられないじゃないですか！まったく。地球人はもう少しかしい種族かと・・・、しゅひはへん！（すみません！）ひひすひいまひた！（言い過ぎました！）てふはら、むほんでほっへつえるのひゃへてくらはい！（ですから、無言でほっぺ抓るのやめてください！）」

あんまり生意気な口を利く物だから思いっきり頬をつねってやった。

「で、なんで俺の家に住むんだ？」

「ほっへふねひなはらひかないへふはい（ほっぺつねりながら聞かないでください）！ほろほろひぎれ・・・（そろそろ千切れ・・・）、あうっ」

限界までほっぺを伸ばしてから放してやった。あ、ちょっと涙目になってる。

「うう、なんでこんな事に・・・」

「自分の胸に手を当てて聞いてみるんだな。で、なんでこの家なんだ？」

「行き先がない女の子を追いつけますか!？」

「知るか。勝手に月でも火星でも金星でも行けばいいだろう？」

「酸素がないと死んじゃうじゃないですか！それと金星は入った瞬間燃えちゃいます！そんなのも知らないんですか？まったくこれだから・・・」

「これだから・・・なんだ？」

「な、なんでもありません！そんな怖い顔して手をほっぺに伸ばしてこないでください！」

「それで？なんで不法侵入してまで俺の家に住むとかいうんだ？」

「んゝゝゝ・・・？なんとなく。近かったから？」

「なんとなくでガラス割ってまで人の部屋に入られてたまるかー
ー！」

「しゅみまへん！しゅみまへん！ほっへはやへへー！（ほっ
ぺはやめてー！）」

俺は、千切れそうになるくらいほっぺを思いっきりつねってやっ
た。

その後、女は俺の部屋の隅で何かぶつぶつ言いながらしくしく泣
いていたが、とりあえず無視して窓の修理に取りかかった。（てか、
ここに居座る気かよ！？）

第1話：遭遇、不法侵入者！？（後書き）

初めまして！久路間左京です！めんどいんで以後左京で。

暇つぶしや気まぐれで読んでくださった方ありがとうございます！
初めての作品で試行錯誤の結果出来上がった第1話。

まだまだ力不足でこのような作品ですが努力して面白くしていきたい
と思います。

それと自分が見てて思ったのですが・・・

- ・三点リコード多いっ！
- ・文章短い！
- ・会話、長！
- ・そして何より誰一人名前が出てない！
- うう、実力不足・・・、以後精進します。

それでは！またいつか！

第2話：遭遇？宇宙人と俺の家族

「まあ、ずいぶん遠いところから」

「ほう、宇宙人さんなのか、初めて見たな」

「行く当てもなく大変でしょう。よかったら泊まっていきなさい？部屋も余ってる事ですし」

「はい！ありがとうございます！」

「・・・・・・」

なんか納得できない。なんでうちの親はこう、感受性豊かなんだ？

今、会話しているのは母、撫子なでしこと父、翔一郎しょういちろう、そして謎の宇宙人女。頬が少し腫れている気がするが、気にしない。

ちなみに、父と母は年齢不詳、実の息子の俺ですらわからない。俺が今17歳だから、どう考えても30歳は越えているはずだが見た目は20代前半にしか見えない。

以前両親に、年を聞いた事があったのだが、父曰く、

「人間、一つくらいは秘密を持っているさ」

とのこと。母曰く、

「ふふふ、女の人に年を尋ねる物じゃないわよ？」

と、笑顔で返された。

なぜか、そのとき母が持っていた包丁が不気味に輝いたのを憶えている。

当時の俺は、世の中、一つや二つくらい不思議があってもいいだろう、と割り切った。

決して、包丁が怖かったからではない。

それと父と母の容姿だが、父は眼鏡をかけた優男風、母は長い髪でその名の通り大和撫子のような人だ。

母は高校の時フアンクラブができていたほどの美人らしい。

「?、どうしたの遊ちゃん?」

「いや、父さんも母さんもなんでこんなに簡単に宇宙人って信じるんだよ! おかしいでしょ! ? そしてお前! 人が話してるときにばくばく呑気に飯食ってんじゃねえ!」

怒鳴りながら宇宙人に指を指す俺。

ちなみに遊ちゃんとは俺の事。本名、鷹宮遊月。たかみやゆづき 高校二年生。

「遊ちゃん、人に指を指すものではありませんよ? それに女性に對してお前とは失礼ですよ? そういえば、まだお名前を聞いていませんけど・・・?」

「はい、田中太郎です」

ご飯を飲み込んだ宇宙人はまだそんな事を言っていた。いやだから『田中太郎』は・・・

「まあ、ステキな名前ね」

「ちよつと待てー！ー！そこ！その2人！そろそろおかしいとおもうよ！『田中太郎』は男の名前！女でそれは明らかに変でしょう！？」

なんで？なんで誰もおかしいと思わないの？おかしいと思う俺がおかしいの？

「あら？でも遊ちゃんの名前は最初、太郎ちゃんになるはずだったのよ？」

「・・・そうなの？」

意外な事実。すると父さんが、

「名前を決めるのが面倒だったんでな、もう太郎でいいか、という事になったんだ。ちなみに女の子だったら『花子』にしようと思ったんだが曾曾祖父ちゃんと曾曾祖母ちゃんが太郎と花子だったからやめる事にしたんだ。そこで祖父ちゃんがお前に遊月と名付けたんだ」

「子どもの名前ぐらい親が考えようよ！面倒だからって適当に決めようとすんな！」

「ああ、遊ちゃんが親に向かってこんな酷い口を利くように・・・母さん、悲しいわ。おじいちゃん、ご免なさい、せっかく名付けて

もらった遊ちゃんがこんな子に育つなんて・・・」

「いや、撫子さんのせいじゃないよ。きっとこれは反抗期、親が一度は通らなければならぬ試練なんだ。それにお義父さんはいつも君を空から見守っているはず。いっしょにこの試練を乗り越えよう！」

「ああ、ありがとう翔ちゃん！そうですね、頑張らしましょう」

「・・・、永久反抗期になってやろうか？」

それにおじいちゃんはまだ健在だ。勝手に天に召さすな！

「あとう、私も会話にまぜてもらいたいんですが・・・」

完璧、蚊帳の外だった宇宙人が声を掛けてきた。

「ってゆうかお前、この会話の間でご飯三杯もお代わりしてたよね？しかもおかずに手を付けず白米だけ。飽きないの？」

「はい！こんな美味しいもの、初めて食べました」

こいつの惑星では何を食べてるんだろうね？そういえば、

「お前の住んでる惑星ではなんて呼ばれてたんだ？」

「ん？」

「いくらなんでも田中太郎や花子さんはおかしいだろ？お前の星での名前はなんて言うんだ？」

「私の本名？テルズ・アウリトム・ビムセイ・スラフ、私の星で『聖なる宇宙』という意味です」

「長い、改名しろ」

「ひ、一言！？聞いておいてそれはないでしょう！？人の名前をなんだと思ってるんですか！？、いきなり改名しろって」

「いちいちそんな長い名前で呼んでられるか。舌噛むのがオチだ」

「大丈夫！本人の私ですら、噛むのは年に一度なんですから」

「自分の名前、噛むのかよ！それに、自分が自分で名前言う場面なんてほとんどないだろ！？」

「ありますよ！現に今ここで言ったじゃないですか！テルズ・アウリトムびずっ！？」

「噛んだーっ！」

「やっぱそんな早口言葉みたいな名前呼べるかー！」

「大丈夫です！十回に一回くらいしか噛みませんから！」

「割合高いだろ！お前さっき年に一度といってなかったか！？」

「自分の名前なんて年に十回くらいしか呼ばないじゃないですか
！」

「開き直って威張るんじゃないー！」

「うみゃあー!?!? バージョンアップ!? 千切れる、千切れる！
耳が千切れるー！」

「そらちゃん」

にこにこしながらこのやりとりを見ていた母さんが不意に口を開いた。

「そらちゃんなんてどうかしら? 遠い遠い空からやってきたからそらちゃん。だめ?」

「いや、空って言うより宇宙から来たんじゃない?」

「宇宙^{うちゅう}ちゃんじゃ変だし可哀想でしょう?」

おお! 母さんの口から『変』という言葉が! いや、それより田中太郎の方がもっとおかしいんじゃない?

「空・・・、そら、かあ・・・」

何かを考えるようにそら、空、とつぶやく宇宙人。

「うん! わかりました! じゃあ私の事を空って呼んでください」

「気に入ってもらってうれしいわ! じゃあ、そらちゃん。これからよろしくね」

「こちらこそ」

なんか、きれいにまとめられた気がするが・・・、俺はまだこいつが住む事に賛成してねえ！

しかし、そう言おうにも母さんもこの宇宙人も会話に華が咲いていて出て行けといえる雰囲気ではない。

「はぁ・・・」

ため息をついたとき、いつの間にか風呂に入っていた父さんがあがつてきたので、俺も風呂に入って寝る事にした。

まあ、追い出すのはいつでもできる。
今日は疲れたから休もう。

そして俺は、自室でのそのそベットに入って寝ようとしたときひとつの事実気がついた。

「・・・・・・・・俺、晩飯食ってねえよな？」

第2話：遭遇？宇宙人と俺の家族（後書き）

最近ついてない左京です。

お久しぶりの方、お久しぶりです。
初めましての方、初めまして。

更新がかなり遅れました。
改めて実力のなさを痛感します。

いやあ、参りました。初めて投稿した次の日、ボールが目当たってしまい、ボール恐怖症になってしまいました。

おかげで大会も出られないし、その上今日、足を怪我しました。

アキレス腱が炎症したそうです。

まあ、おかげで小説、更新できたんですけど・・・

愚痴はこれぐらいにして今回の自分の感想を述べたいと思います。

後書きが長い！、以上。すみませんでした。

読んでくださった方、ありがとうございます。

これからも頑張っていきたいと思えますのでよろしく願います。
す。

それでは！また、いつか！

第3話：惨事？、俺の一日

時刻はAM6:00。

いつも通りの起床時間。

いつもと変わらない朝。

俺はベットから起きあがり自室を出てダイニングに向かった。

「あ、おはようございます！」

「よし、出て行け」

「朝、開口一番がそれですか！？よし、じゃないでしょう！」

訂正、今朝はいつもと違う朝のようだ。

「おはよう、遊ちゃん」

「お、起きたか」

「父さん、母さん、おはよう」

「あもう、私には？」

朝食の準備をしていた母さんと、新聞を読んでいる父さんにとり

あえず朝のあいさつ。

朝のあいさつは一日の運勢を左右するものきちんとしなさい。と、教えられたためあいさつは幼稚園の頃から必ずするようにしている。

無視するとまた昨日のような夫婦劇が始まってしまおうというトラップもあるからだ。

ちなみに母さんは専業主婦で父さんは銀行員だ。

「スルーしないでください!」

「・・・はあ、おはよう」

やはりあいさつは大切な事だと思う。静かな朝のためにも。

「相変わらず低血圧だね」

「そらちゃんなんて、5時に起きて手伝いしてくれたんですよ?」

ふうん。こいつがね。そう言えば名前、空になったんだっけ?

「そういえばお前、これからどうするんだ?」

「ふむ?」

・・・早っ! もう朝ご飯、完食してるし!

まだ食べ始めて5分ぐらいしか立ってないのに。

量が少なかったわけでも、がつついてたわけでもないのになんで？

「……んくっ。ごちそうさまでした。そうですね。とりあえず、なんでこのような場所に来たのか、どうやってきたのか、どうやったら戻れるのかのを考えてみます」

ちゃんと飲み込んでから話をする空。意外と礼儀正しいな。非常識だけど。

「ここに来る直前の事は憶えてないのか？」

なんかもうこいつが宇宙人である事を前提で話を進める俺。けどまだやっぱ半信半疑だけだな。

「はい、ここに来る前の記憶がぼっかりと」

「そらちゃんの御家族は心配しないの？」

「あー……。たぶん大丈夫だと思いますちょっと外れてるところもありますし」

外れているところも？他にも何か理由がありそうだが深く突っ込まないでおこう。

「じゃあ、せっかく地球まで来たんだからもう少しゆっくりしていったらどう？」

「はい！地球には昔から興味があったので是非！！」

「ちょっと待て！俺は……」

「遊月」

昨日のように反対意見を出そうと口を出そうと思ったが父さんの一言で中止した。

「遅刻だな」

「!!!!!!」

まずい！

そのあとの行動は速かった。

歯を磨き顔を洗い鞆を持って玄関を出るまで3分。

俺は「行ってきます」とひと言言うと、自転車にまたがり疾風の如く学校へ向かった。

結局、父の予言（？）は的中した。

遅刻しそうなときは、「遅刻するぞ」と注意するだけなのだが、なぜか遅刻するときは必ず「遅刻だな」という。

いつもと同じ時間に出発するときでもたまに言われるときがありそのときもやはり必ず遅刻する。

今日もぎりぎり間に合いそうだったが校門前で自転車転倒。

自分はなんとか転ばずに踏みとどまったが自転車はもの凄い勢いでスライドし学校に入ろうとしていた先生の車にぶつかりそうになりあわや大惨事！

こっぴどく叱られてるうちに遅刻が決定した。

まったく、朝からついてないぜ。

「おはよさん。ずいぶん遅い登校やな。女か？」

「色々あったんだよ」

今、会話している茶髪をつんつん髪男は^{おおともこ}大友紅、この学校の生徒会長だ。

この学校は変わっていて二年生が生徒会長になるシステムだ。

二年になってまず初めに会長選挙、生徒会役員選挙を行い三年は執務を後輩に譲り隠居するのだ。

少々アホでお調子者で軽い性格だが幾多の立候補者を破りなぜか会長選挙に当選。

これも世の中の不思議のひとつだ。最近ではこの学校の七不思議のひとつとなっている。

なりはこんなものだけど、意外にも将棋部所属。3年が将棋部にいないためこいつが部長だ。

それと口調だが、生まれが関西らしく、それでその口調にしているらしい。

けど、俺の記憶ではこいつは幼稚園の頃にはもうこっちに居たし、両親は標準語話してたぞ？

「何ぶつぶついつてんの？」

「ん？ああ、なんでもない」

口に出てたか？

「それよりさっきの質問の続きやけど、遅刻の原因はやっぱり女か？」

しつこいな。それに、ちょっと違うが意外に鋭い。なんかこいつ意外なことだらけだな。

「高校生活も残り二年やで？女の子との出会い大切せな、高校なんて遊んでなんぼや！」

「だまれ、それにお前はもう4〜5年はこの学校にいそうじゃないのか？紅点^{あかてんかいちよう}会長様？」

「！、それ言うな――！」

紅点会長とは、こいつの名前とテストの赤点をもじって俺が付けたあだ名。

いつの間にかみんなも、こう呼ぶようになってきた。

・
・
・
ちなみに赤点が多いと留年だ。それがたとえ生徒会長であろうと・

「くっくく、なあ遊月。あんまり人の嫌がる事言いまくると、俺の精神が崩壊してとても口が軽くなってしまいかもしれんぞ？そう、たとえば君の甘酸っぱい初恋の青春ストーリーとか？」

「！」

まずい！目が据わって関西弁じゃなくなってる。これは本気だ！

「そうだな、あれは確か・・・」

「うゝえ、と、どっ、ちよつ、ま、待て」

気がつけば周りの奴らも聞き耳を立てている。

いつもは冷静沈着な俺がここまで慌てているからみんな興味を持つたらしい。

情報の流出を防ぐさまざまな案が出てくるがどうしようもない案ばかり。

かくなる上は殺るか？殺るしかないのか？いや、さすがにそれはまずいだろ！

理性で必死に止めようとするが、けど体が勝手に動いて・・・

「ほら、席に着け！今週の俺の目標はチャイム席学習だ」

た、助かった……。いろんな意味で助かった。人の道を踏み外

さずにすんだ、ありがとう先生！

残念そうに席に着くクラスメートたち。

次の休み時間にはみんな忘れている事を祈ろう。

そんな希望を抱きながら席に着き、俺は二時間目の授業、数学の教科書を出して授業に取りかかった。

第3話：惨事？、俺の一日（後書き）

最近、読者数と小説評価を覚えた左京です。

今回も更新が遅れに遅れました。

なんかもう、更新するたびに謝ってばかりですね。

けど、すみません。

もう少しこのペースが続くと思います。

読んでくださった方、感想を書いてくださった方、本当に感謝しています。

アクセス数はまだ160程度ですが読んでくださった方がいると思うと狂喜乱舞(?)しております。

まだまだ未熟ですが、今後も暇つぶしでもいいので、読んでみてください。

それではまたいつか！

第4話：消失？宇宙人、空

人生そう都合よく行きませんでした。

はは、たぶん今日一日で周囲からの俺を見る目が変わったんだろうと思う。

実際、みんな生暖かい目で俺を見てたし。

俺の『甘酸っぱい初恋の青春ストーリー』を普通に紅の野郎が話しやがった。

あれは思い出したくもない、人生でもっとも消去したい記憶ベスト1だ。

内容は割愛させてもらいたい。というか、喋りたくない。

「はぁ・・・」

今日、97回目のため息をついた俺。

気がついたら帰りのホームルームが終わっていた。

「おっと、言い忘れていたがテストが近い。しっかり勉強しとけ。わかったか、大友！」

「なんでワイだけ名指し！？」

「安心しろ、お前が留年しても私は見捨てない。というより、素

直に流れて来年もう一度この学校をまとめる気はないか？」

「安心できへんし、絶対に嫌やー！ー！」

「人間あきらめも大事だぞ？」

なんかこんな会話が耳に入ってくる。

留年を勧める教師もどうかと思うが、まあ多分これで紅のやつも少しは勉強する気になっただろう。

これが先生の目的か？

いや、この教師なら本気で言ってるのかもしれない。

それより早く帰ろう。速くこの場から離れたい。

なんかいろんなやつが俺に話しかけてくるようになった。

『がんばれよ』とか、『人生色々あるからな』とか、そんな感じ。

なんか明日学校に来るのが嫌になってきた。

登校拒否児に覚醒してしまいそうだ。

登校拒否ってこういう理由からなっていくんだろーなと思いつながら家路についた。

「ただいま」

帰ってみると母さん一人だった。

「お帰り、遊ちゃん」

「あれ？あいつはどこいった？」

すると母さんは、少しだけ暗い顔をして、

「それがね、急に帰る方法が見つかったって言ってそらちゃん、
帰っちゃったの」

「え、・・・」

「もう少しゆっくりしていったら？って聞いてもこれ以上迷惑は
掛けちゃいけないって・・・」

「そっかわかった、いや清々したよそれじゃ俺部屋にいるから」

そう一気にまくし立てると俺は部屋に向かった。

急に帰る方法が見つかった？これ以上迷惑はかけられない？

行く当てもなく帰る当てもなく俺の家にさまよい込んできて、ふ
ざけんな！

いきなり現れて、別れも言わずいきなり消えてどこまで非常識な

んだ！

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・？なんで俺は怒っているんだ？

確かに失礼なやつだとは思うが、居なくなれば清々するはずだろう？

けどなんだ、怒りの感情に似ているがちよっと違う、もやもやした感じ？

・ ・ ・ ・ ・まあいい、これでうるさいやつもいなくなったんだ。これでいいじゃないか。

俺はそう言い聞かせると、とりあえずテストのため勉強に取りかかった。

そして夕食時

「遊ちゃん元気ないわね、どこか具合悪いの？」

「え、いや全然元気！なにもない」

「そう？そらちゃんいなくなって寂しがってるように見えるけど」

「そ、そんなことない！ ・ ・ ・俺もう寝る。ごちそうさま」

俺はその場を逃げるようにその場から去った。

母さんが何か言った気がするがよく聞こえなかった。

――二日後――

「行ってきます」

空がいなくなって二日、いつも通りの日常。二日前の朝とは違う。

俺はゆっくりと学校へ向かった。

ホームルームぎりぎりで学校に到着して席に着いたとき、紅がなにか騒いでいた。

「重大ニュースや！今日この教室に転こ・・・」

「よし、席に着け、ホームルームだ」

ベストタイミングで担任が入ってきて朝のホームルームが始まった。

「よし、重大ニュースだ。このクラスに転校生が来る。というより、もう来た」

驚きの発言。しかし今の俺にはどうでもよく感じられた。

「喜べ、野郎共!! 転校生は女子、しかも結構かわいいぞ」

おお、という野郎共の声。紅なんかは髪を整えている。多分無駄な足掻きだ。

「紹介しよう! 鷹宮空だ!」
たかみやそら

そして、教室に入ってきたのは帰ったはずの宇宙人、空だった。

第4話：消失？宇宙人、空（後書き）

最近寝不足気味の左京です。

なんとか更新しましたが、今回やたら字数が少ない上に半端な部分で終わってしまいました。

相変わらず実力不足、ついでに睡眠不足、情けないです。

それに今回ボケ、突っ込みが非常に少ない！

すみません。次の布石のため、今回は繋ぎとします。

次回からはボケ役も復活したのもっと、コメディーっぽくしていきますので今後ともよろしくお願いします。

それではまたいつか！

第5話：出現！？転校生（前書き）

かなり遅れました。
申し訳ありません。

忘れ去られてるかもしれないので、前回までのあらすじです。

帰ったという空。
なんか鬱な気分の遊月。
そこに転校生。

こんな感じです。
以上、あらすじでした！
では本編！

第5話：出現！？転校生

「・・・はい？」

なんでこいつがここにいる？

帰ったんじゃないのか？

いやそれより、なんでこの学校にいるんだ？

転校生？はあ？

とりあえず、隣に座っていた紅を殴り飛ばす。

「ぐぶおっ！？」

そのまま意識を失ってしまった。

しまった、強くやりすぎたか？これじゃ、痛みがあるかどうか聞けないので夢かどうかわからない。

まあいいや。反省はしても後悔はしない。次は気をつけよう。

「あー、先生。紅が体調を崩して意識不明になったので保健室連れてきます」

「ああ、いいぞ」

幸い、一番後ろの席だったので、目撃者は一人しかいなかったよ

うだ。

その唯一の目撃者、教壇の上で自己紹介しようとしている空に『言ったらお前に明日はない』的な視線を送りぐったりしてぴくりとも動かない紅を担いで保健室へ向かった。

・・・ホントにこいつ大丈夫か？

「で、なんでここにいます？ 帰ったんじゃないのか？」

ここは自宅。そして目の前には正座している空。学校が終わり帰ってきて早々ロビーに正座させた。

それと母さんは買い物に行ったらしく家にはいなかった。

「あのー、フローリングに正座って結構、っていうかかなり辛いんですけど」

「それが何か問題でも？」

「いや、問題って言うかその・・・なんでもありません、はい」

「でさっきの質問の続きだが・・・」

そう、帰ったんじゃないのか？

「いやあ、帰る方法がまるっきり見つからなくて正直暇だったんですよ。そこで私は考えました。『どうせ帰る手段が見つからないのならこの地球を満喫してみよう』って」

「その考えた結果があんの学校への編入か」

「そうです」

胸を張って答える宇宙人。

「じゃあなんでここ数日間いなかったんだ？」

「いましたよ。普通に、この家に」

・・・は？何を言っているんだ？だって家じゃ会ってなかったろ？

「遊さんに会わないようにするのは大変でしたよ」

そう言いながら笑う宇宙人。

会わないように？

「そう言えばなんで会わないようにしてたんだ？」

「それは撫子おばさんが・・・」

ピンポーン

あ、誰か来た。

「ちょっと待ってろ」

「遊さくん足がしびれて・・・」

「そこを動くな」

冷酷にそう告げると俺は玄関に向かった。

ピポンピポンピポンピポンピポン

うるさい客だな。

ピピピピピピピピピピピピ・・・、ガチャ

「よう！ ゆごふううつぶ！！？？？」

扉を開けチャイムを連打していた犯人の顔を確認するなりそいつの鳩尾に一発食らわせた。

うずくまっている犯人は紅だ。こいつ生きてたんだ。

「よう、紅。今日一日保健室にお世話になっていたようだがもう大丈夫なのか？」

「それが、今、また、同じ事を、しようとしたやつ科白かい！川の向こうのきれいなお花畑に行くところだったんやで！？」

もし行ったなら太郎曾祖父ちゃんと花子曾祖母ちゃんに挨拶しておいてくれ。それはそうと、

「んで？ 用件は？」

「スルーかいな！！ 人がせっかく臨死体験談を・・・」

「用がないなら帰れ。こっちは今取り込み中だ」

「ひどっ！ なんか俺につめとうないか？」

「はっはっは、本当は肉体的より精神的にボロボロにしてやりたいんだがな」

俺はいろんな意味で忘れない。『甘酸っぱい初恋の青春ストーリー』を。

そう、秘密の無くなった人間におそれるものなど何もないんだ。

「いいっ、す、すまんかった。それより用ちゅうんは他でもない。今日転校して来た空ちゃんを見にきたんや！！」

「ああ、空なら奥に・・・」

ん、ちょっとまって！

「なんで空がうちにいるってわかったんだ！？」

「ん、いやだって、クラス的女子が噂してたで？ 空ちゃんとお前が同棲してるって」

「同っ・・・！」

どうやったらそんな話が！？ いやまて、まさか・・・

俺は駆け足で空がいるはずのロビーに戻った。

「そおら~~~~！！！」

「あ、遊さん。なんだかもう足の感覚が・・・」

俺は空の肩をガシツとつかみ、がつくんがつくん揺らしながら空を問いつめた。

「言えっ！ 白状しろ！ 貴様クラスの女子から質問攻めにあつたよな？ そしてお前はなんて答えた！？」

「みぎゃ~~~~！！ 足が、足が~~~~！！ 新手の嫌がらせですか~~~~！？」

「いいから答えろ！！！」

「ぎゃ~~~~！！ せめてがつくんがつくん止めてください！」

「こたえろ~~~~！！！」

「はいっ！ どこから来たのとか、趣味とか、好きなものとか、どこに住んでるのとか、髪綺麗とか・・・」

「それだ！！ どこに住んでいるって言った！」

「どこって遊さんの家に決まってるじゃないですかっ！」

・・・。

なんていうか、なんだか、もう、学校行きたくなってきた。

登校拒否覚醒の瞬間。目覚めるときは、今！

「おい。何アホな事考えとんのや」

いつの間にか紅が家に上がっていた。

「それはそうと、この子が空ちゃん？めっちゃかわいいやん！」

「ふっ、紅。俺は暫く自分を見つめ直す旅に出る。探さないでくれ」

「何アホなこというとんねん。親戚の子がうちに泊まってる事がそんなに恥ずかしい事かいな？シャイヤな」

・・・んっ？

「親戚？」

「ん？空ちゃんて遊月の親戚の子なんやろ？それでどういう理由かは知らんけど楼北高校に転校してお前んちにお世話になってるって聞いたが？」

「・・・そうそう！いやあ、昔からの知り合いで一緒の学校になるのが恥ずかしかったただけだ。うん」

「初めまして！・・・ですか？鷹宮空です。以後よろしくお願いします！」

「わいは、大友紅。紅くん、でかまわへん。よろしゅう、そらちやん」

「はい、『紅くん』さん」

「いや、紅くんさんって・・・」

「あら、紅くんお久しぶり」

なんだかんだしているうちに母さんが買い物から帰ってきた。

「ちょうどよかったわ。翔ちゃん、急に帰れなくなっちゃったらしいの。せっかくだから紅くんも久しぶりに夕食食べていけない？」

「お久しぶりです。それと夕食是非とも！」

「そう、じゃ、待っててすぐ支度するから」

「あ、私も手伝います」

そう言って、母さんを追いかけてキッチンに行こうと立ち上がり・・・

べしゃっ。

「足～～～～。びりびりします！！」

そのまま立てずに倒れ込んだ。

「無理すんな。すわっとけって」

「いえ、居候させてもらってるんですからこれくらいは手伝わせてもらいませんと」

そう言いながらよろよろとキッチンの方へ向かっていった。

「いやー、いい子やな空ちゃんって。遊月、わいはお前がうらやましい！」

「なにがだ？」

「だって、幼馴染みやで？しかも同じ学校に転校、これぞまさしく王道やん！」

「なんの王道だ。まったく」

と、夕食が出来るまで俺たちはこんな下らない会話をしていた（おもに紅が、幼馴染みのすばらしさについて一人で演説していただけだ）。

夕食を食べ終わり紅が帰って部屋で勉強していたら空が入ってきた。

「遊さん遊さん」

「なんだ？」

「いや、帰る方法が見つからなくてももう少しこの家に居させてもらっていいですかっ」

なんだ、そのことか。

俺は、勉強を中断してだるそうな口調でこたえた。

「あーあ、せっかくお前が居なくなっって平和な日々が戻ってきたんだがな」

「あう、私そんなに酷い事してましたっけ？」

不法侵入する時点で迷惑を越えてるんだがな。

はあ、それも仕方ないか。

「はあ・・・、いいよ、もう少し居ても」

「えっ、いいんですか！」

「どうせ駄目だっていったら騒ぐんだろ？今は夜だし騒音公害で近所に迷惑がかかる」

「そんな理由ですか！？」

「あー、もう、居ていいって言ってるんだ、騒ぐな。さあ、用はすんだろ？勉強するから帰れ」

俺は宇宙人を部屋から追い出そうとした。

それに何か、居てもいいという科白が少し照れくさかったから。

「あ、遊さん。最後にひとつ質問していいですか？」

「なんだ？」

「『どうせい』ってなんですか？」

「ぶっ！、・・・・・・」

こうして俺の騒がしい非日常的な日常が帰ってきた。
・・・・・・いや、始まったのか？

第5話：出現！？転校生（後書き）

暑いです。左京です。

お久しぶりの方、お久しぶりです！まとめて読んでくださった方、ありがとうございます！

色々忙しすぎて、更新が遅れまくりでした。すみません。

見捨てられてないか心配です。まあ自業自得なんですけど、出来れば見捨てず読んでみてください。暇つぶしで結構です。

それと、7月にはいるともう少し速く更新できると思うのでそれまでは勘弁してください。

あ、けど7月まで更新しないというわけでもないのでよろしく願います。

そんでもって宣伝です。

もう一つ小説書こうと思います。

タイトルは「ふぁーすと・こんたくと」この小説の空視点にしようと考えています。

こちらも時間があれば読んでみてください。

以上、後書きと更新の間隔が長い左京でした。

それではまたいつか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9613b/>

今日から我が家に宇宙人！？

2010年10月21日21時42分発行